

# 戦中期通俗小説における「時局」性の様相

－竹田敏彦の昭和十年代中期の作品を中心に－

Essay on how pulp fiction writer discussed the situation under the war time

－On the works of Takeda Toshihiko in the early 1940's－

根 岸 泰 子  
NEGISHI Yasuko

## 1 はじめに

昭和戦中期における国民の心性の問題を考えると、時局への同調性の強いテキストが読者に強く支持されたケースへの考察は欠かすことができない。本稿では大衆を読者とする通俗小説ジャンルで圧倒的な人気作家だった竹田敏彦のテキストをとりあげて、時局的なテキストにおける通俗性と社会性への考察を通して、戦時下の文学と大衆の心性の交錯の実態の一端を明らかにしたい。

ここで戦中期における竹田テキストの「通俗小説」としての位置づけを簡単に確認しておく。

まずいわゆる大衆小説とは異なり、竹田の作品は一貫して同時代の社会を描写する現代小説であって、時代物は含まない。また竹田は、菊池寛や小島政二郎のように文壇と通俗小説の二領域にまたがることはなく、掲載メディアは大衆娯楽雑誌（『婦人倶楽部』等の女性雑誌を含む）および新聞連載小説欄に限定される。

上記のようなメディアにあっては、作品は基本的に大量消費を目的として、知識人読者ではなく大衆をターゲットとした”商品”として企画され、大資本メディアによって大量生産される<sup>(1)</sup>。新聞記者出身で、昭和5（1930）年頃から実話もの作者として出発した竹田は、「子は誰のもの」（『主婦之友』1936.10～1937.12）以降、読者大衆からの人気を不動のものとし、昭和戦中期を通じての売れっ子通俗作家となった<sup>(2)</sup>。そのため雑誌や新聞での連載を平行して抱えることが多く、作品には同一モチーフの使い回しやセンセーショナルかつ都合主義的なストーリー展開、人物の類型性などのパターン化が目立つ。また連載小説のメディア特性上、その長編現代小説は意識的に同時期の時事性を強く反映することが多くなる。戦時下という時代では、この形式は必然的に作家に対し時局へのスタンスの表明を迫ることになるが、竹田テキストはそれを避けるのではなく、むしろ積極的にそれに応じている。

そのような状況のなかで、時局へのスタンスも含めて大衆からの圧倒的な支持を受けていた竹田に対し、文壇およびその忠実な読者たちは彼の作品を文芸とはまったく無縁の存在とみなし続けた。同時代の文芸時評は、一部の例外を除いて竹田テキストを完全に黙殺し、大衆小説時評にあってすら「講談社流」、「読物書き」などと評されることがしばしばだった<sup>(3)</sup>。

しかしながら他方では、大衆小説時評という限定つきながら、竹田テキストの時事性とその社会的

(1) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第4巻事項』講談社、1977中の和田芳恵「大衆雑誌」の項参照。竹田敏彦の年譜等については、萱原宏一（『日本近代文学大事典 第2巻』）、和田芳恵（『大衆文学大系〈20〉長田幹彦、吉屋信子、小島政二郎、竹田敏彦』講談社、1972）、岡保生（『大衆文学大系 別巻 通史・資料』同、1980）を中心に参照。

(2) 大阪時事新報、大阪毎日新聞（1912-1924）の司法記者、のち新国劇文芸部長（1924-1929）。新国劇辞任後に専業作家として自立するまでの間は『講談倶楽部』からの依頼を中心に同時代の事件や世相を題材とする「際物小説」、「実話物」と呼ばれる読み物ジャンルの書き手だった。戦後も人気作家として、婦人雑誌や新聞を中心に作品をコンスタントに発表し、1961年6月没。

(3) 本稿では、この時期の時評のおおよその目安として中島国彦編『文芸時評大系 昭和編1』（ゆまに書房、2007）を参照している。

パースペクティブの広さ、またテキストの構成の手堅さ、批評性を評価する声は少なくなかった。とくに昭和十年前後からは、長編小説というジャンルと竹田テキストの時局性のうちに小説における社会性の可能性を見出し、純文学とはまったく異質のジャンルとしての通俗小説の新生面を期待する言説が見られるようになってくる<sup>(4)</sup>。

以下本稿では、その社会性をめぐっての上述のような文壇との緊張関係を前提に、戦中期の読者大衆が敏感に反応した竹田テキストの特性を、昭和十年代中期を中心に背景となった昭和戦中期の社会状況（時局性）と照応させながら考察してゆきたい。

## 2 通俗小説としての竹田テキストの特性

まず、竹田テキストの可能性に期待する同時代のまとまった評として、当時の大衆小説作家、海音寺潮五郎の「作品月評」（『文学建設』1939.2.1）を確認しておこう。

この作家は不思議な作家である。この人ほど、大衆に人気があつて、この人ほど文学青年の仲間間で評判の悪い人は稀である。かつて、牧逸馬といふ作家があつたが、好一對である。

が、人気があるのは、あるべき理由があるのであるから、その点をよく考へてみる必要がありはしないか。

筋の構成が低い大衆に受けるやうになつてゐるのがその全部だといふのが一般の意見である。が、それは五十歩百歩だ。他の作家だつて、ずいぶんいい加減な筋を組んでゐるのだ。むしろ、この人のこの作品<sup>(5)</sup>など、構成はずいぶんがつしりしてゐる。周到な伏線を配置して揺るぎのないものである。

僕は、この作家の作品を解剖して、二つの解答を得た。その一は、この人の作品には、痛烈な道徳が貫いてゐること。よし、それが低いものにせよ、高いものにせよ、全編を烈々たる正義感が貫いてゐる。これが正義を愛する大衆を打つのである。第二は、この人が多方面の知識を持つてゐることだ。日本の作家は恋愛しかわからないのが大多数だが、この人は政治、経済、社会、科学、いろいろな方面に相当な知識を持つてゐるらしく見える。従つて、同じく恋愛を書いても、それを、いろいろ分野の違つた社会に、違つた色彩を持たして描き出してみせる。これも、平板な小説に飽いた読者を魅し去る所以であろう（中略）。

勿論、この人の作品の大多数は文学として許容し難いいろいろな難点を持つてゐる。荒つぽくて、書き飛ばしのあと歴然たるものがある。が、それでも、子細に研究してみなければならない作家の一人である。

ぬぐいがたい通俗性の一方で、幅広い社会性—時事性、パースペクティブの広さ、世相への強い批判意識—をみせる竹田テキストから、海音寺はあえて後者のうちに同時代の大衆文学への可能性を見出そうとしている。以下、海音寺が指摘した竹田テキストの二点の特性について、この時期の竹田の作品に即して簡潔にまとめておこう。

まず竹田テキストにおける「痛烈な道徳」、「烈々たる正義感」の具体的な内容だが、昭和十年代前後からの竹田テキストを概観すると、ほぼ全作に共通するのは、金銭を巡って浮き彫りにされる市場主義（自由主義）経済体制の暴走、そしてほぼ固定化されてしまった階層社会の実態への強い批判意

(4) 明石鐵也「大衆文芸時評—実話小説その他」『文芸』1936.6.1, 山下賢次郎「大衆文芸 近来の佳作、竹田敏彦の暁は遠けれど」『日本學藝新聞』1936.7.1, 明石「大衆文芸時評—新人素描」『文芸』1936.8.1, 後述の海音寺、鶴欣四郎「大衆文芸時評」『読書人』1942.2.1など。

(5) 竹田敏彦「血の歡喜」『講談俱樂部』1939年1月号。

識である。

たとえば、短編「新聞記者」(『富士』1936.5)では、銀行取付け騒ぎを発端に、新聞報道によって一家心中に至った庶民の預金者の悲劇をからめながら、公的責任感をもたない銀行家の傲慢さや格差社会の悲惨さ、報道の社会的使命という理念などが手際よく盛り込まれた。当時の時評はプロットの通俗性を批判する評と、「社会的な大衆文芸」の可能性を指摘する評とに二分している<sup>(6)</sup>。

竹田テキストには教育界をとりあげたものも目立つが、ここでも教育界内部の管理職の腐敗と並んで、教育現場に干渉する富裕層の保護者の横暴と管理職との癒着、児童生徒の家庭環境を蝕む格差社会のありようが批判の対象となる<sup>(7)</sup>。

竹田テキストの「道徳」性のうち同時代にあってきわめて特異といえるのは、法律に対する信頼感である。短編「検事の妹」(『講談倶楽部』, 1936.9)では、人情よりも法大系が優先される。それは、成文化された法は、首尾一貫した合理的な体系として状況依存的な人間感情よりも信頼に足るからである。また民間航空機産業を扱った「熱情の翼」(『富士』1938.10-1939.12)では、アメリカの軍需産業から狙われた国産A5型戦闘機の特許権をめぐる暗闘の中で、たとえ国益を損ずる可能性があっても相手方との契約は遵守されなければならないと考え苦悩する社長や、恩義ある社長をかばうために殺人の冤罪を負った青年に、それはヒロイズムにみえても実際は真実の隠蔽であり「国法を冒瀆する、赦すべからざる罪悪」にすぎず、法こそが真の正義であることを信頼せよと説く弁護士が登場する。前者などは一歩間違えば国賊扱いされかねないが、今日的に見れば彼らの主張はきわめて理性的かつ合理的なものである。「若い未亡人」(『日の出』1939.10-1940.12)は、当時の社会問題だった戦争未亡人問題を取り上げているが、ストーリーの中で家制度的な道徳観と未亡人個人の権利の保護がバッティングした場合、竹田テキストは未亡人保護の当時の新たな法律を盾にとって保守的な道徳観と対立することをいとわなかった<sup>(8)</sup>。

作品構成という観点からみると、竹田テキストの階層社会批判というメッセージは、作中人物の設定によってより明確にされる。竹田テキストでの女性主人公のキャラクター設定は、おしなべて若くさわだって美貌であることに加え、中産階層(中流上層を含む)から労働者階層への階層的な下降(零落した令嬢)という初期設定が目立つ<sup>(9)</sup>。これによりテキストの富裕層批判は、女性主人公が庶民層の経験を積むことで、富裕層だったかつての自己の限界を実感的に剔抉する視点が可能になる。

人間関係の構図も同様である。女主人公に対しては、富裕層の青年と下層中流もしくは労働者階層の勤労青年という対比的なポジションの二人の男性が彼女に関心をもつパターンが多い。通俗小説である竹田テキストの場合、女主人公がどちらの青年をどのような理由で選ぶか/選ばないかという部分に、資産家階層に対する語り手の評価が端的に反映させやすいからだろう。なおジェンダーの観点から見ると、男性の作中人物の場合は階層的な下降というケースは少なく、応召による戦場体験がこれに相当することが多い。すなわち富裕層の青年が兵卒として応召し、下士官となっている青年(もとの使用人もしくは知人)に再会するパターンだが、この場合は戦場体験を契機に富裕層青年の回心と階級間の融和(戦場での友情)が成立するという結末が目立つ<sup>(10)</sup>。

海音寺が指摘した社会的パースペクティブについては、テキストに映りこんでいる時局性がこれに

(6) (無署名)「大衆文芸時評—新人のお手並み」『日本學藝新聞』1936.5.1および、前掲の明石鐵也「大衆文芸時評—実話小説その他」『文芸』1936.6.1。

(7) 長編では、前掲「子は誰のもの」、「太陽の子等」『日の出』1941.1-1942.3にその傾向が強い。

(8) 根岸泰子「昭和戦中期の通俗小説における「戦争協力」の実態—竹田敏彦「若い未亡人」(昭14・10~15・12)と戦争未亡人問題」『岐阜大学国語国文学』40, 2014.3 参照。

(9) 代表作とされるうちの「制服の街」『報知新聞』1938.6~12, 「生産化粧」『婦人倶楽部』1940.1~9, 「脂粉追放」『読売新聞』1940.8-1941.4がその典型である。

(10) 「制服の街」では、女主人公に恋する二人の青年のストーリーがこの話型を取ることで、複雑なプロット構成が可能となった。「戦場での階級融和」というモチーフ自体は日中戦争期の戦記小説等を起源としてこの時期の文学全般に共通するものだが、堤千代等この時期の通俗小説はこれを通俗小説の貴重な資源として効果的に用いている。

該当する。この時期は、1937年頃に始まる軍と独占資本との紆余曲折をへた協力体制がやがて国家社会主義的な戦時統制経済へと統合されてゆく過程にある。具体的には、重化学工業および航空機産業を中心とする民間軍需工場や新興財閥の振興、農山漁村経済更生運動下の産業組合の拡充、そして国民精神総動員(1937.9)、国家総動員法(1938.4)そして七七禁令(1940.7.7)以降の第二次近衛内閣の新体制運動への移行過程であり、まさに国家と国民生活にとっての曲がり角の時だった。竹田テキストは作中人物たちの境遇を通して浮かび上がるそれらの政策の実態を、驚くほど詳細にとらえている。

竹田テキストでは、それらは公的な事象以外の日常の些事のうちにも顕現する。たとえば零落した家の女主人公は、生計を立てるために否応なしに社会にアクセスせざるをえない。「制服の街」『報知新聞』(1938)は、女主人公(元民友党党首村瀬喬一郎の令嬢)が、銀座三丁目のサクラ商会という婦人服・化粧品・女性雑貨の高級専門店の入社試験を受ける場面から始まる。しかしこの店自体、新体制運動に便乗した「企業界への婦人進出」を名目とする名流夫人たちの有閑的な合同出資事業であり、羽振りのいい子爵夫人、弁護士夫人、実業家夫人に対し、出資金の拠出にも苦心惨憺の民友党代議士夫人が悔し紛れに軍需工業企業の社長夫人に口走る「お金お金と大きな顔をなすつても、三井三菱の奥様ぢやありますまいし、多寡が、時局の風に乗った、成金程度のご身分ぢやありませんか」という捨て台詞などは、明らかに政党政治の沈滞と上述の民間軍需工業の振興という時代状況を映し出すリアルな描写といえる。そのような社会的な背景を背負った夫人たちが、自己の社会的立場に規定された行動をとることで物語を進行させてゆく、そのあたりは、文学の社会性と物語性とがびったりとマッチした、竹田テキストの独壇場といえる。

付随して竹田テキストでは、作中人物の経済状況への関心度が高い。先述の「若い未亡人」の場合、ほぼ同時期に吉屋信子も同じテーマを扱った「未亡人」『主婦之友』1939.7-1940.12を連載していた。いずれも複数の未亡人たちを主人公として戦争未亡人の生活と再婚問題を描いているが、現実世界では、国家からの扶助料が未亡人にとって自らの生活設計上きわめて重要な関心事であり、また扶助料をめぐる親族間の争いはしばしば社会問題ともなっていた。竹田テキストではこの扶助料をめぐる主人公と実兄、姻戚との葛藤がストーリーの主要な推進力となっているのに対し、吉屋テキストでは、亡き夫や求婚者に対する未亡人の心情のゆらぎがクローズアップされる一方で、扶助料についての言及は一切ない。この差異は、双方のテキストの特徴、とくに竹田テキストのリアリズムのありよう—社会的存在としての人間観—をよく示している。

### 3 「脂粉追放」—物語内容の概略—

以上述べてきた竹田テキストの特性—社会的視野と「道徳」性—を具体的なテキストに即して、本節以下で考察してみたい。取り上げるテキストは、代表作のひとつであり第二次近衛内閣の新体制下の同時代を背景とした長編、「脂粉追放」(『読売新聞』1940.8-1941.4)である。以下、本節ではその物語内容を確認しておきたい。

「脂粉追放」の時代背景は、奢侈品等製造販売制限規則(七七禁令)が施行された1940(昭和15)年の東京の夏から年末までで、テキストの冒頭の時間は読売新聞連載開始の時期とほぼ重なっている。

登場する主な人物は、藤堂家、山森家、川辺家、水野家の人々および道玄坂の川辺呉服店支配人の真木鋭一、そして商店連合会理事長で個人商店の店員のための修養道場を主催する大林唯吉翁である。

まず藤堂家の父宗太郎は、もともと京橋の肥料問屋だったが、経営が傾いた折に知人の連帯保証人となって負債を抱えたあげく、株相場で破産。三人の子供たちにも学校をやめさせ、二流保険会社の外交員としてノルマに追われつつ土地ブローカーとして一儲けを狙っている。主人公で長女の昌子は、家計のために渋谷道玄坂の老舗山辺呉服店の店員として働き、弟の慎三も工場で働きながら夜間中学に通う。自宅は東横線祐天寺の小借家の並んだ一角にある。

山森家は当主の憲之助が東京窯業、山森商事を経営。別荘地開発なども手がける一方、満州に資本金五千万円のパルプ製造の補助繊維工業会社（国策会社）の設立を計画している。事業家には珍しく妻、長男で山森商事課長の鎮男、長女の美千代らを慈しむ家庭人で、田園調布に邸宅をもつ。一方川辺家は、藤堂昌子が勤務する川辺呉服店の主人喜一郎、妻、娘の浩子とその弟から成り、リューマチの喜一郎は勤勉な子飼いの支配人真木鋭一に店を任せきりで、渋谷の松濤の屋敷にすることが多い。

水野家の父芳太郎は、生家の甲府の老舗の水晶問屋を相場で潰して逃げるように上京し、藤堂宗太郎のいる保険会社に同僚として勤務。似たような経歴から宗太郎と親しくなり、闇の土地周旋の情報を分け合っている間柄である。心臓病で病床にある妻のお陸、尋常小学校六年生の宏一とその妹季子とともに、洗足の借家に居住する。

物語は昌子が大林翁の安房勝山海岸の修養道場に受講生として派遣され、海で遭難しかけた山森家の令嬢美千代を救助したことから始まる。昌子の際だった美貌と聡明さ、慎ましさは山森家の人々を魅了し、その縁故を利用して昌子の父宗太郎は、山森社長に東横線菊名の五万坪の土地を工場用地として売り込もうとする。提示した価格は地主たちの希望額に栄之助らブローカーたちが六割の割り増しをした額だったが、昌子に惹かれていた鎮男は、悪質なブローカーたちを排除し地主たちとの直接取引で土地を購入した上で、宗太郎だけに二万五千円を情報提供の謝礼金として渡すことを決める。

一方七七禁令の施行により、昌子の勤務する川辺呉服店でも十月の贅沢品の販売禁止<sup>(11)</sup>に備えて、禁制品の在庫を外商で売り抜けるか、それとも統制に従うかで店内に不協和音が生じ、主人の喜一郎の方針に反対し娘の浩子との縁談も断った真木は店を去り、昌子もまた人員整理の名目で減首される。

好意を寄せる真木に相談することもままならぬまま、鎮男からの好意の印として父に提供された謝礼金を昌子が謝絶し続けるさなかに、宗太郎の抜け駆けを知った芳太郎が怒りのあまり彼を鉄瓶で殴り、殺人未遂で逮捕されるという事件が起こる。貧苦にやつれ果てた病身をおして警察に赴いたお陸と宏一母子に涙で謝罪された昌子は、次第に彼らに深く同情するようになり、父も水野も「利潤追求」という世の趨勢の犠牲者だと考えるようになる。一方減首された昌子を心配した美千代が見舞いの洋菓子箱に忍ばせた二百円が取り違えで水野一家に届いてしまったとき、好意を謝しながらも『「お金は自分で働いて頂くもの」のみかねがね子供も得心いたし居ります際とて、どうぞ悪しからずご了承の上』と紙幣を返してよこしたお陸のみごとな手蹟の手紙に昌子、美千代、鎮男は深く動かされる。

しかし昌子の留守に再び訪れた美千代に宗太郎は謝礼金を要求し、困惑する昌子にそれを銀行に入金させた直後に、脳溢血の発作を起こして死亡。水野家の母子は驚愕するが、彼らを見守ってくれる隣組の人々の好意に支えられて、宏一は葬儀に出席して謝罪し、昌子は鎮男に謝礼金の通帳を返却する。

その後、水野の公判が始まり、帰京して元住吉の日本計器の見習い工になった真木の好意に助けられながら、昌子は軍需景気に沸く工場の女子工員として働く決意をする。一方、真木を追い出した山辺呉服店は、禁令破りの外商販売が当局に露見し、店の金を横領し喜一郎を恐喝していた店員が逮捕され、喜一郎も取り調べを受けて店は急速に没落してゆく。偶然にも水野の公判と、山辺呉服店の統制違反事件は同日に開廷され、証人の鎮男が土地取引の謝礼金の配分の偏りが事件の動機と証言したため、水野の傷害致死の刑には執行猶予がつき、一方山辺の店員二名は、見苦しい罪のなすり合いのあげくに実刑をくらう。公判の終了後に、鎮男は水野宅に関係者を招き、事件全体の真の解決のためにある提案を行う。

以上の梗概でも明らかなように、「脂粉追放」というテキストは零落した美貌の女主人公、彼女を取り巻く富裕層の青年と勤労青年の対比、取り違えといった趣向など、通俗小説的一類型的でセンセーショナルな一要素が強い。しかしながら、それぞれの家庭の過去や七七禁令、国家総動員体制下の重

(11) 禁令に抵触する金糸・銀糸・漆入りの高級品については「十月七日限り売買厳禁となった」とあり、禁令施行から小売店での売買禁止までには実際にはタイムラグがあったことがわかる。

工業新興政策など、当時の政治・社会情勢が描き込まれることで、社会的なパースペクティブが成立している点もあわせて指摘しておきたい。以下、時節ではその点に着目し、とくに七七禁令関係の叙述に見られる特徴を中心に確認する。

#### 4 「脂粉追放」における社会性

「脂粉追放」での真木鋭一と川辺呉服店系のストーリー展開は、七七禁令（奢侈品等製造販売制限規則）と密接に結びついている。

老舗の高級呉服店は、新体制運動の中で狙い撃ちされた富裕層一軍需成金たちを中心とする一相手の商売であるため、七七禁令によって直撃を食らう。これに対する真木の見通しは、以下のように語られる。

昨年来、未曾有の膨大予算に伴ふ急激な通貨膨張の見透しと、物資の供給不足につれて、インフレ傾向の促進は、世間一般の常識とされ、「金より物」への慌しい気分が、一そうこれを助長するなかで、真木一人が、反動を主張して、去年の冬物仕入れにも、飽くまで消極説を固持し、喜一郎と争ったくらゐだつた。

「物価は必ず下火に向く。単に通貨の膨張と、物資の不足だけを見て、物価高を予断するのは、過去の自由主義経済学の固定観念に過ぎない。これを国家の意思で阻止し、個人の無限な物欲を抑えて、公益経済に立て直すために、統制主義の新経済策が生れたので、現にそれは他の国々でも、十分実効を挙げている。日本も今でこそ、政府の不慣れで、予期の効果は見えないが、やがて必ず効力を発揮して、物価は下がり、思惑は外れて、そうした利己主義者が臍を嘔む日が、きつとくるに違ひない。さうならなければ、個人よりも、国が先に参つてしまう<sup>(12)</sup>」

真木の議論は、単純に見えたが、時代の主流をつかんでゐた。遂にそれはあらゆる方面に、次第と実現の傾向を示し来つて、衣食住三大生活要素の一つである呉服は今やこの状態である――

このあたりの真木の認識は、まさに新体制のプロパガンダそのままとっていい。しかし真木のとった経営方針は、奢侈品の在庫処分は断念し、廉価な新規商品への転換と人件等の厳密なコスト計算による冗費のカット（社長に対しても月給制を採用）、そして品揃えとディスプレイの工夫で消費者の新たな志向をキャッチしそれをリードして購買意欲をかき立て<sup>(13)</sup>、利益につなげようという、合理的な発想に基づくものだった。それに対し呉服屋の協同組合も山辺も、在庫品の処分と警察署長への禁令施行延期の陳情といった方策以外念頭にない。結局、値引きした奢侈品の外商による売りさばきという法令違反すれすれの商法と、女子店員たちのリストラ、そして残った従業員への時間外労働の強要といういわばブラック雇用によって七七禁令を乗り切ろうとする山辺と真木は決裂し、真木は店を出て行く。ここに私たちは、社会状況と作中人物の行動とがなめらかに連動してストーリーを紡ぎ出してゆくさまを見ることができる。

真木系のストーリーで留意すべきは、彼が最優先に掲げたのが従業員の雇用の確保だったという点である。これは、国家のための国民の側の犠牲を受忍するさきほどの引用部分とは異質の、労働者の権利擁護の主張である。そして雇用の確保は国家のためと言い切るロジック<sup>(14)</sup>は、新体制が内包し

(12) この論旨は、佐藤卓己『言論統制 情報館・鈴木庫三と教育の国防国家』p286、中公新書、2004で紹介されている鈴木庫三の下降的平準化論に近い。

(13) 「正直に申せば只今では何れの御婦人も、これから先の、衣類の選択に迷つていらつしやるのでございます。この際逸早く、時勢の要求に適応した、しかも高雅な趣味と、経済を兼ねた、適切な品を選んでお目にかけることは、商人の正しい義務であるばかりでなく、我々商人自身にとりまして新しい開拓の道かと存じます」という真木のこぼを参照のこと。

(14) 以下の山辺に対する真木のこぼ「この際強つてお願い申上げたいのは、ここ一年、お店の方から、店の者に、お暇を

ていた国家社会主義的な部分への同調というよりは、むしろ民衆の互助性を重んずる心学的なニュアンスが強く、山辺呉服店の破綻という勤善懲悪的な結末もその解釈を後押ししている。一方で真木の新経営方針には、ウェーバー流のきわめて合理的に判断し行動する商人像も感じられる。この時期の読者大衆が支持した竹田テキストの時局へのスタンスが、このような倫理的イメージで示されていたことは、当時の読者の心性を推し量る上でも重要である。

ここで、些事に社会変動を反映させる竹田テキストのテクニクに目を転じよう。藤堂宗太郎の破産の原因は「ここ六年前までは、京橋付近に相当の店を持つて先代譲りの肥料問屋を営んでゐたのだが、満州豆粕の流入と、産業組合の膨大な勢力に押されて、急激な痛手を喰つていた」とあるが、実はこれも当時の国家経営の状況をよく示す部分である。産業組合は農村再建のための官製運動の目玉で、農家への肥料・農具から日常生活必需品までを、中間流通機構を排して共同販売・共同購入により供給するシステムを作っていた。しかしこれはそれらを農家に供給していた都市部の中小商人、とくに肥料商にとっては大打撃であり、1938年には長野県上田の産業組合支局前で抗議の自殺者まで出たという。しかも肥料を生産する化学工業大資本はこれによって無競争で独占価格での供給ができ、政府も経済統制機構の準備という準戦時体制を実現することができた。その陰で、農民と都市部の旧中間層はそのようなからくりを理解できぬままに対立せざるを得なかったわけで、宗太郎の没落もこのような時代の構造に根ざしていたとみるべきだろう<sup>(15)</sup>。植民地経営に関わる満州豆粕の流入も同様であり、山森の満州進出もこの延長線上にある。また菊名の土地買収というトピック（すでに用地所得した企業として森永製菓と日立製作所らしい名が上がっている）もこの時期の重化学工業を中心とする活発な設備投資の状況を象徴する事象である。このような竹田テキストの視点は、まさに当時の竹田の評価者の一人に「またプロレタリア文学への執着だと妄評されるかも知れない」<sup>(16)</sup>と語らしめるような印象を与えていたのである。

## 5 「脂粉追放」における社会批評としての金銭観

ここでは、竹田テキストにおける「道徳性」すなわち社会批判に焦点を当ててみたい。前述のように、資本主義経済とそこから生じる格差社会および富裕層の感性（金銭万能信仰）批判というモチーフは、これまでの竹田作品にもしばしば見られるものだった。しかし「脂粉追放」はそれをさらに発展させて、昭和10年代中期の軍需景気から取り残された都市部の貧困家庭を舞台に、必要最低限の生活が満たされないような状況でもなお“金銭では買えないものがある”，“金銭に取り憑かれた人間は、心の平安から見放される”という命題は成立するかというむづかしい設定に挑戦している。テキストは、鎮男からの謝礼金を固辞し続ける昌子が、事態の進展の中でさまざまな人物や哲学に出会いながら金銭万能信仰に抵抗しうる論拠を求め続ける姿を中心に、水野宏一系のストーリーと山森鎮男系のストーリー、山辺呉服店の破綻のストーリーがそれを補完する構成によって、この問題に対する解答を提示してゆく。

土地売買の仲介に対する鎮男からの金銭提供を固辞し続ける昌子の理論は、おおよそ以下のようにまとめられる。

1. 単なる仲介行為だけによって八十五万円もの巨額の金が動くということ自体が、怖ろしい。

出さないといふことをごさいます。多少経営の窮屈は免れませんがそこはお互いに忍び合つても、行先のない人間を解雇するだけは慎みたいと思ひますが…」および「それより此際、お国のためにも、一番警戒すべきことは、失業者の激増だと思ひます…」を参照のこと。

(15) 大江志乃夫責任編集『図説・昭和の歴史 5 「非常時」日本』pp.52-53, 集英社, 1980参照。

(16) 明石鉄也「大衆文芸時評 新人素描」『文芸』1936.8

2. 謝礼金をもらえるありがたさよりも、この金が原因で、父が犯罪すれすれの行為に走り傷害事件の犠牲になったこと、また加害者の家族にも深刻な影響が出たということの方が恐ろしい。
3. 子として父の命を金に換えて生活の糧にすることは浅ましい。

これに対し、老舗の家業を破綻させた負い目から一攫千金を狙って狂奔する藤堂宗太郎および水野芳太郎という二人の父と、資産家の息子の山森鎮男とは、困窮状態にある家族の救済あるいは意中の女性への経済的援助のための手段として金銭を用いようとする人々である。両者は「急場の助けとして、金に勝るものはない」と考える点で共通する。

したがって宗太郎と鎮男にとって、上記の昌子の言い分は、若い娘の単なる感傷あるいは強情さとしてしか理解できない。また昌子自身も、彼らの一見合理主義的な金銭観に同感できない自己の感覚の根拠を明確に説明することはできない<sup>(17)</sup>。特に「我が身に代えても子どもを思う父の慈愛」という趣旨の宗太郎の言説には彼女は抵抗ができない。

どんづまりに至った昌子を支えたのは、水野陸の「どんなに貧乏しても『お金は自分で働いていただくもの』とのみ、かねがね子供も得心いたして居ります」という心学的な道德律だった。貧困の中でも失われぬお陸のプライドに前々から深い感銘を受けていた昌子は、彼女のプライドのありかをこの道德律に見出し、迷わずこれを指針とする決意をする。

このような昌子の結論を、実業家の山森憲之助は「この娘は、わし達を避けてゐるんぢやない。金の人生に及ぼす逆効果を、一生懸命で警戒してゐるんだ(中略)。金に馴付かない奴は強い。美千代の悪戯から、これはえらい娘と取組んだものぢやよ」と最大級に評価する。鎮男も、金銭が引き起こした惨劇が昌子の強いトラウマとなった可能性を真木から指摘され、それを思ひやるのがまったくできなかった自分にショックを受けて、自分は好意を金銭でしかあらわさなかったことに気づく。

同時にテキストは、宗太郎や山辺喜一郎が娘たちの前でみせる「媚びるような目を細めに、にやりと耐えきれない喜びを漏らした」「見堪へぬほど、卑しく惨めな」笑顔や、「異様な輝きを帯びていた」瞳と「青ざめた顔」の「悪魔のやうな笑ひ」を示す。これは、金銭に取り憑かれて常態を失った人間を視覚的に表象することで、「黄金万能論」の裏面を暗示している。続く山辺呉服店の破綻は、「はかない物欲の影をのみ追う人の、恐ろしい身の末」と意味づけられる。

以降、勤労こそが人としてのプライドを支えるという昌子の理念は、馘首された昌子が職業安定所でみた女子機械工補導生募集の看板と「興亜日本の銃後を固める女子産業戦士」というキャッチコピー、そして謝礼金を預金するために赴いた銀行での「勤儉節約 貯蓄報国」のポスターに接続されることで、昌子に工場労働者の道を選択させる。当然これはテキストが総動員体制という時局を肯定しているとみなすことは可能だが、一方でこれがテキスト中で、資本主義の病弊—「黄金万能論」—への昌子なりの抵抗という意味を持たされていることことも見逃すべきではない。

他方、宏一系と鎮男系のストーリーは、「黄金万能論」への別方向からの抵抗理念を提示する。

宏一系のストーリーは、働きたくとも働けない人間<sup>(18)</sup>に対する救済策を示すべく、「互助」という大衆的な道德律を選択する。以下、宗太郎の葬儀に供える香典を隣組の八百屋の藤助から渡された宏一が、辞退しようとする場面を引用する。

「さう言ふだらうと思つたが、しかしね宏ちゃん、心配することはないんだよ(中略)。お前さんとこはお母さんも、揃ひも揃つてお金のこととなると堅すぎるくらい物堅い。勿論、これは立

(17) この点は昌子の代弁者たる大林唯吉翁も同様で、富が人間の勤労意欲を削ぐリスクを指摘する大林を、鎮男は一面的な見方と批判し、それに対し大林は「この一面を取り去ろうとするのには、よほど立派な考え方でない限り、却って卑俗な、金持流の黄金万能論に陥るだけです」と述べるが、この段階では鎮男を納得させるに至らない。

(18) 陸は心臓病で病床にあり、宏一はまだ尋常六年生(13歳)で就業年齢に達していない。



派なことで、人の懐を当てにして、当たり前のように思ふやうになればもう人間もお終ひだ。しかしだね、われ、隣組の間で気をつけ合ふことは、いはず、お上のお指図みたいなもんだよ。物堅いと言ふことは大そう結構だが、まあこの程度で、近所同士が、助け合ふ気持ちまで気に懸け過ぎて、まるきり背を向けてしまふのも、これはまた考へものだよ（中略）」

宏一は、臉をうるませて藤助を見てゐた目を伏せ、包を持つたまま暫く黙つて歩いてゐたが、「でも、僕度々で、すみません」

「そう思へばお前さんが、大きくなって、また近所隣や周囲の人に、親切にすれば、それでいい訳ぢやないか。それでこそ世間は立つてゆくので、持ちつ持たれつといふのは、そのことだよ。（後略）」

藤助は、納得のゆくやうに言つて優しく宏一の肩に手をかけた。

「わかりました…僕、勉強して世の中へご恩返しします」

「さうだよ、それでいゝんだよ」

藤助は、大きく肯いてみせた。

ここで隣組という官製の組織は、情けは人のためならずといった石門心学的な（つまり前近代の）共同体の道徳律に読み替えられる。洗足の大衆のこのような心性のうちに、テキストは、「黄金万能論」の防波堤たりうるかもしれない、社会間接互惠性という理念を見いだす。

一方事件の原因となった山森から芳太郎への土地斡旋の謝礼金二万五千元は、物語の結末でその本来の趣旨に立ち戻って、斡旋の実際の仲介者（芳太郎と榮太郎を含む）五名に平等に配分されることになる。これは鎮男の意思に則ったものであり、結果として昌子とお陸たちに当座の窮状をしのぐのに十分な金が渡ることになった。昌子がこれを了承したのは、謝礼金が五等分されたことで、父は五人の仲介者のひとりとなり、昌子と山森家とのいきさつとはまったく関係なく、純粹にその仲介業務に対する報酬を受けるという形式に改まったからだろう。

鎮男の提案は、きわめて合理的な解決法であるとともに、テキストの当初の命題である「黄金万能論」へのそれ自体有効な対抗理論として機能している。第2節でも見たように、合理主義への志向性は竹田テキストの特徴であるが、これはそのもっと成功した例といえるだろう。

## 6 まとめ

以上概観してきたように、これまで通俗小説作家としてほとんど文学史の中で顧みられなかった竹田敏彦のテキストには、社会化した文学という昭和戦前期の文学史的問題を側面から照らし出す可能性をみてとることができる。

一方、資本主義における所得格差や金銭万能主義に対する竹田テキストの警戒感と批判意識は、一面では昭和15（1940）年までの政府の施策—労働組合や無産政党の要求を入れるかたちでの産業別の格差の是正、所得の平準化と労働者の地位向上や農家の経済的厚生対策—に対して、親和的なスタンスをとっていたことは否定できない。しかしながら伊藤隆『近衛新体制』（中公新書、1983）が指摘するように、1940年7月の近衛新首相のラジオ放送「大命を拝して」が、自由主義・民主主義の否定（それらの国体との背馳）とこれまでの政党政治の否認・経済統制の不可避を宣言し、続く「基本国策要綱」（26日閣議決定）での明確な個人主義の否定（「自我功利の思想を拝し国家奉仕の観念を第一義とする国民道徳を確立す」）のスタンスが、やがて大政翼賛体制へとなだれ込んでいったのは異なり、すでに見たように竹田テキストには、労働者の権利意識や合理主義的考え方への志向性、前近代的是あるものの格差社会の行き過ぎに対する歯止めたりえたかもしれない石門心学的な理念への信頼がみてとれる。この時代にさまざまな立場で揺れ動いていた読者大衆の心性の一面は、このよう

な竹田テキストの「道徳性」に共鳴したのではないかというのが、私の仮説である。

次稿では、今回は触れなかった竹田敏彦のテキストにおける「文学の社会化」という側面を、当時の文壇の側からの竹田作品に対するアプローチをたどりながら検討することとする。付随して、検閲体制との関わりという点から、当時竹田敏彦に強い関心を持っていた情報局情報官の鈴木庫三の動向<sup>(19)</sup>についても文壇の竹田観との関わりも交えて分析するとともに、読者からの竹田テキストへの具体的な反響を精査することで、今回の仮説を実証的に検証する予定である。

※本論考は、平成二五～二七年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）による研究「戦時下文学史の再編成に向けて一階層性とジェンダーの観点から一」の成果である。

---

(19) 「生産化粧」第一回には、「陸軍省情報部鈴木少佐」による「竹田君に期待する」という推薦の辞が掲載されており、また「国防国家と美術（座談会）—画家は何をなすべきか」（『みずゑ』1941.1）での鈴木発言には、「脂粉追放」に関する言及と思われる部分が散見される。